福田寺だより

昭和61年6月1日　福田寺だより

発行
神奈川県小田原市飯田岡二五七
飯田山　福田寺
住職　橋本尚信
TEL0465-36-2755

発刊にあたって

弘法大師は『声字実相義』という書物の中で「如来の説法は必ず文字による・・・・声字分明にして実相顕わる」と述べられています。これは仏法の真理は、声や字に正しく表現されて初めて真実の相が顕れるということです。

今ここに、『福田寺だより』創刊号を発行致しました。創刊号といっても、かつて昭和四十八年三月十五日に第一号を発行した記録がありますが。しかしそれから十有余年、新しく檀家になられた方もあり、又記憶に無い方も多いと思いますので、改めてこの号を以て創刊号とし、今後定期的に発行することになりました。教化活動の一端というような大仰なものではなく、何か福田寺と縁の有る方々との対話の場となればと思っています。そのためには一方的な通信に終わらず、ご覧になった皆様の感想や声が反映できる内容にしたく思いますので、お気付きの点が有りましたらどしどし編集部宛てにご意見をお寄せ下さい。

冒頭に掲げました弘法大師のお考えは、実在するものは必ず何らかの形をとって表現されるものであると同時に、その表現は単なる形式ではなくて、生命力それじたいの顕現であるとするものです。この小冊子がお大師さまのほんの一部でも実践できればと念じております。どうか温かいご支援とご指導を頂けますようお願い申し上げます。

行事予定

七月五日（土）　施餓鬼会
午後二時半より
お施餓鬼料　二千円（塔婆一本につき）
亡くなられた方が無い方、墓地だけの方、水子供養をしたい方、無縁者の供養をしたい方等々、檀家以外の方も是非お参りください。
詳細は同封の『お知らせ』をご覧下さい。

八月十三日～十六日（一部七月）
お盆
年に一度ご先祖さまが懐かしい家に帰ってくると云うわけですが、これを家族一同、親族一同がなかよく揃ってお迎えして、一年間の報告をし、又今後一年の無事をお願いする、と言うことですから何よりもご先祖さまに喜んでもらえる報告ができることが、一番大切なことではないでしょうか。

特集 本堂新築工事着工

昭和六十三年春落成めざして

昭和五十六年に発願された福田寺本堂新築も、檀信徒関係各位の御協力により着々と進んでまいりました。経過報告はすでに何回か御通知申し上げた通りです。

福田寺だより

昭和61年6月1日

去る二月二十二日、三浦忠社寺建築と正式に契約が結ばれ、二年間の工期で建築が始まりました。下小屋、プレハブ等建築の準備がすすめられ、四月に入り本格的に仕事が始まりました。今後の予定は六十一年秋地鎮祭、六十二年春上棟式、六十三年春完成です。長い工期となり、その間、檀信徒の皆様には何かと不都合をかけるかと存じますが、よろしく御協力賜りますようお願い申し上げます。

三浦忠社寺建築紹介

三浦忠社寺建築は、大正八年に当時を代表する宮大工の一人、三ッ矢幸一氏が設立、昭和四十四年に義理の孫にあたる三浦忠氏が引き継ぎ、現在に至っております。

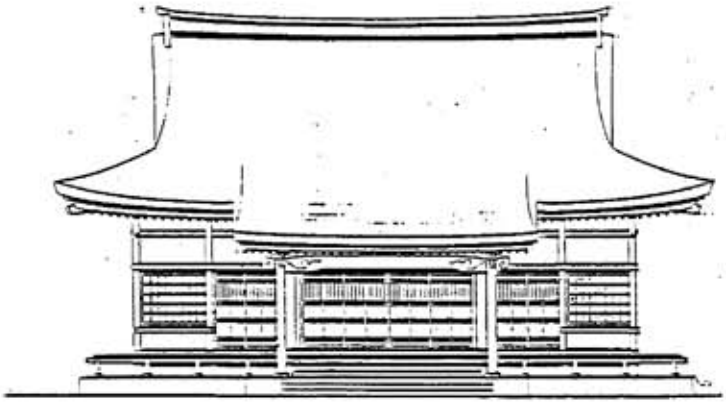
三浦忠氏は昭和十四年生まれ、十五才で大工の修業に入り、社寺建築の魅力に引かれて二十才で三ッ矢幸一棟梁の下に入り、そのかたわら、都立小石川工業高校、工学院大学（夜学部）で理論的な勉強をされた方です。

昭和五十四年に、三浦棟梁が手がけた東京都練馬区の「愛染院」の全工程を記録した映画『木組・銅ぶき・漆喰壁』が、昭和五十六年度教育映画祭に入賞し、NHKテレビで放送されました。三浦棟梁の信条は、くぎ一本に至までおろそかにせず、事務所経費などムダな費用を極力おさえ、定められた予算内で少しでも良いものを完成させるところにあるようです。それは、わずかの間仕事ぶりを拝見させていただいただけで、充分知りえるところであります。

さて、工事現場主任として常住しながら仕事を取り仕切っている、服部正次職方は長野県出身で、三浦氏とは先代の頃から、先輩として陰に陽に三浦社寺を助けてきた人で、卓越した技術の持ち主で、ただただ社寺建築一筋に生きてこられた方です。今年から次男克美君が、父のあとを継承すべく現場に寝泊まりし、昼間は父の指導を受け、夜は関東学院の建築学部で勉強をしております。

皆様からも、機会が有りましたら励ましの言葉をかけてあげてください。

現在この服部親子のお二人が、現場に常住しながら、木取りその他の準備に当たりつつ、仕事場の管理をしてくれております。

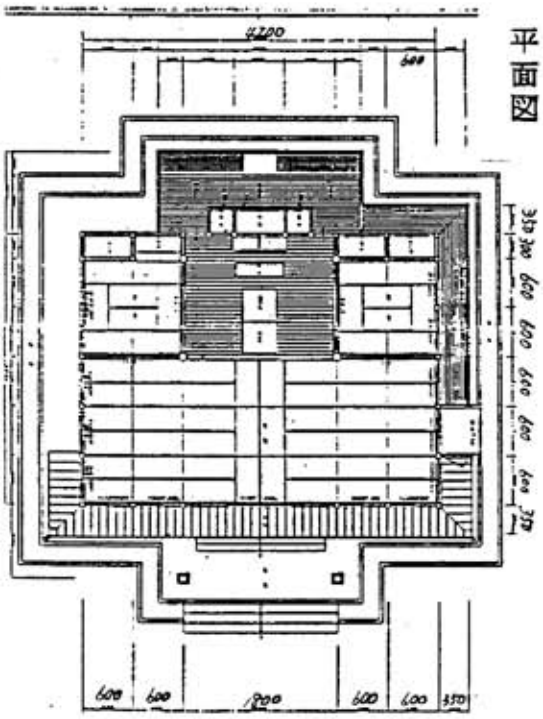


本堂正面図

工事場は裏の地を利用

大きな下小屋を建てられるだけの広い工事場として、コーエイ印刷株式会社に賃貸してある裏の土地を利用することができました。完全返還まで、まだ七年余りありますが、コーエイ印刷の好意により使用していない一部を、工事完了まで一時返還してもらったわけです。これにより工事車の出入りは、すべて裏を利用することになりました。一年前には、未だ裏には大きな工場が建っていたことを考えると、本当にタイミングが良かったのだとつくづく思わずにはいられません。

平面図



銅板寄進のお勧め

本堂建設に当たり、広く有縁の皆様に対し銅板の寄進をお勧め致しております。銅板には、住職がご寄進の方の願いごととお名前を一枚一枚筆で書き、祈念をした後屋根に葺きます。一枚二千円ですので、ご親戚の方や知人にも是非お勧め下さい。

申し込み用紙は福田寺にありますので、お参りの時にでもお申し出ください。

ーえんかく　Ｉー

福田寺の舟が教科書に

昭和六十一年度より全国の小学校で使われている社会科の教科書に福田寺の舟が登場しました。これは教育出版株式会社発行の小学社会三年下で、学校のうつりかわりを調べるうちに寺に舟があるという想定で出てきます。以前から福田寺の舟は小学校の実地見学の教材として使われているようで、毎年近隣の小学校の生徒が見学に来ております。

ご存じのように、この舟はさかわ川の氾濫に備えたもので、長さ七～八メートル、巾一・三メートル、深さ五十センチ程で、本堂の裏の軒下に縛りつけてあります。

昭和三十九年に発行された「とみず子ども風土記」にも福田寺の舟のことが詳しく書かれていますが、福田寺の裏手にあたる土地は、いつもさかわ川の大水の通り道で、明治四十三年七月、栢山のていぼうが切れた時にも、どっと押し寄せてきました。昭和初期頃まで、木橋であった飯田岡橋が、よく狩川の大水のため流されるので、橋を直す間渡し舟として使われていたようです。

富水とは、水が富んでいると同時に、水との闘いの土地でもあったようで、二宮尊徳全集にも見られるように、特に「岩流瀬（がらせ）、大口の土手」ー山北町ーとはきってもきれない関係があり、この二つの土手が切れることにより富水方面までが、大水の被害にあったようです。この付近の小字名に「・・河原」や「・・島」が多いのもそのためでしょうか。

このような歴史を物語る舟も、かつてはたくさんあったはずですが、現在福田寺に見るのみとなってしまいました。貴重な資料ですので、本堂新築後も何とか保存したいと考えております。よい知恵がありましたらお教えください。

～詩～

足の裏の美

尊いのは
頭でなく
手でなく
足の裏である

一生人に知られず
一生きたない処と接し
黙々として
その務めを果たしてゆく
足の裏が教えるもの

しんみんよ
足の裏的な仕事をし
足の裏的な人間になれ

坂村真民著
「念ずれば花ひらく」
より